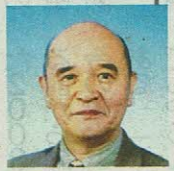


寄稿 没後10年 いま三浦哲郎を読む

阿修羅の眼で描いた社会

勝又浩 (文芸評論家)



三浦哲郎は2010年8月に79歳で亡くなった。今年(没後10年)に当たるが、それを記念してこの23日から神奈川県近代文学館で「三浦哲郎展」が開催される予定だった。三浦文学の豊饒さを感じていただくにはまことによい機会であった。ところが、ご多分に漏れず、であるが、このたびの新型コロナウィルス騒動の出現で三浦展は来年度の春までの持ち越しとなってしまう。没後10年の節目を外すことになって三浦ファンとしてはまことに口惜しい限りだが如何ともしがたい。しかし、私の個人的な考えでは、コロナウィルス騒動の、こんなときにこそ思い出してもらいたい三浦作品がたくさんあるのだ。

紙(1998年)があの肉を食べたり、乳呑児が売り買いされるまでになった。そんな地獄を記録によりながら書いている作者も恐ろしさ、人々はとうとう死に、そのたびに帰郷して



インタビューに答える三浦哲郎さん
東京都練馬区で2001年12月28日、西本勝撮影

は餓死者のための供養塔を詣で祈ったと、別のところで打ち明けている。

三浦小説にはこうした極限状況を描いた作品がたくさんあって、その事実にも驚く。と言って

も、人間が作りあげる凄惨な極限状況そのものは戦後文学、とりわけ戦争小説にいくらでもある。しかし、三浦文学が提示しているものは、戦後文学のそれとは明らかに違う。戦後文学の根底にはあの戦争への反省、つまりそこそこ被害者の視線や心情があって、この不条理を作った一部の人間や社会への怒りや告発という要素を免れないのだ。

しかし、三浦文学にはそうした気配はみじんもない。人物たちはみな誰を恨むでも責めるでもなく、ただただ大自然の暴戾に耐え、不条理な運命を寡黙に受けいれている。そして、そうであるから、であるだろう、私はいつも、愚かさや健気さの混合矛盾である人間存在そのものへの深い悲しみに撃たれてしま

う。そうして、唐突だが、私の好きな俳優たち、興福寺の阿修羅像や東大寺の広目天のことなどをそのたびに思い浮かべる。あれらの、悲しみとも怒りとも、裁きとも許しともみえる仏たちの面差しは、言うならば『おろおろ草紙』に描かれたような人間たちの悲しい歴史を数えきれないほど見続けてきた果てのお顔なのだろう。

三浦小説にはこうした極限状況を描いた作品がたくさんあって、その事実にも驚く。と言って、人間が作りあげる凄惨な極限状況そのものは戦後文学、とりわけ戦争小説にいくらでもある。しかし、三浦文学が提示しているものは、戦後文学のそれとは明らかに違う。戦後文学の根底にはあの戦争への反省、つまりそこそこ被害者の視線や心情があって、この不条理を作った一部の人間や社会への怒りや告発という要素を免れないのだ。

しかし、三浦文学にはそうした気配はみじんもない。人物たちはみな誰を恨むでも責めるでもなく、ただただ大自然の暴戾に耐え、不条理な運命を寡黙に受けいれている。そして、そうであるから、であるだろう、私はいつも、愚かさや健気さの混合矛盾である人間存在そのものへの深い悲しみに撃たれてしま

「忍ぶ川」(60年)以来、(かつまた・ひろし)